

がん検診減 遅れる発見

コロナ下 105病院で診断9.2%減

主ながんの診断数の推移

日本対がん協会と関連3学会の共同調査から

胃がん	2019年 1万9470件	
	2020年 1万6868	前年比 -13.4%
大腸がん	2万1975	
	1万9724	-10.2%
肺がん	2万3010	
	2万1543	-6.4%
乳がん	1万9528	
	1万7919	-8.2%
子宮頸 がん	4831	
	4601	-4.8%

コロナ下 105病院で診断9.2%減

2020年にがんと診断された人が前年より9・2%減ったとする調査結果を、日本対がん協会などが4日、発表した。新型コロナウイルス感染症の影響で、がん検診の受診者が減ったことなどが影響したとみている。主な5種のがんで約4万5千人の診断が遅れたと推計され、今後は進行したがんが見つかるケースが増えて、患者の予後の悪化や死亡率の増加が懸念されている。

▼3面=進行した状態で発見

調査は、日本対がん協会のほか、日本癌学会、日本癌治療学会、日本臨床腫瘍学会の3学会が共同で実施。

がん診療の拠点病院など486施設を対象に、胃、肺、大腸、乳、子宮、頸部の各がんの診断への影響を尋ね、105施設から回答を得た。

その結果、20年のがん診断件数は8万660件で前年比9・2%減。意見した3学会のコロナ対策ワーキンググループ長、寺島毅・東京歯科大教授は例年のがん診断者数と今回の集計を踏まえ、「五つのがんで、全国で4万5千人ほどの診断が遅れていると推定してもいいのではないか」との見方を示した。

緊急事態宣言が出るなどして、昨年4月以降はがん検診や各種健診が一時中止され、その後も受診や通院控えが続いた。日本対がん協会のまとめによると、20年のがん検診の受診者は、20年前年に比べて約3割減っていた。

今回の調査では、早期で見つかるケースの減少が目立ち、胃がんの1期は17・4%減だった。日本対がん協会の垣添忠生会長は「がんは初期のうちは無症状であり、診断が減ったのは受診が減ったことの反映だ」と話した。
(熊井洋美)